

# 上下する「金魚」に歓声

## 杜陵小「くらし」でペットボトルで浮沈子



金魚型しょうゆ差しで作った「浮沈子」の動きに歓声を上げる杜陵小の5年生

東京工業大学OBでつくる「蔵前工業会」の理科の出席授業「くらし」が6日、盛岡市着町の杜陵小（小野寺正彦校長、児童230人）で行われた。5年生88人がペットボトルやプラスチック製のしょうゆ差しを使って「浮沈子（ふちんし）」作りに挑戦。かつて研

究者や技術者として活躍した定年世代の指導メンバーが「物の浮き沈み」の原理を易しく説明した。

浮沈子はバスカルの原理などを活用したおもちゃ。金魚型のしょうゆ差しに、わずかな空気を残して水を満たし、満水のペットボトルに投入。ふたを閉めてペットボトルの側面を押すと、「金魚」は底の方へ沈み、離すと浮かぶ。

同様に、小さな二つの穴を開けた円筒型のしょうゆ差しを使って、押すと回転する浮沈子も製作。子どもたちは目を輝かせながら「なんで」「どうして」と驚きながら、何度も浮き沈みを繰り返していた。

菊池倭子さん（5年）は「回りながら、浮いたり沈んだりして面白かった。理科が大切だと分かったので頑張りたい」。菅原祐太君（同）は「長く実験できて楽しかったし、勉強になった。家にある材料でも作れそうなので、やってみたい」と話した。

「くらし」は蔵前工業会がOBたちに協力を求め、2005年にスタート。日本の将来を背負って立つ、子どもたちの理科への興味関心呼び覚まそうと、身近な材料を使った実験や理科工作の出席授業を展開している。

同工業会の岩手県支部が「国際リニアコライダーも誘致しており、子どもたちの理科への関心をさらに高めたい」と呼び掛け、杜陵小には、くらしかの講師4人が来校した。子どもたちを指導した剣持克夫さん（67）は「神奈川県大和市」は「理科って面白いという気持ちで大事にしたい。理科は日常の暮らしの中で必要なもの。不思議なことに疑問を持ち、自ら調べるきっかけになってくれればうれしい」と願った。